

海外情報

中国・韓国の唐芋事情 東アジア唐芋ワークショップの開催

NPO唐芋ワールドセンター 理事長 **郷原 茂樹**

2010年2月1日から4日まで、「東アジア唐芋ワークショップ」が鹿児島市と鹿屋市で開かれた。これはNPO唐芋ワールドセンターの主催で、中国からは中国農業大学の劉慶昌教授など7名、韓国からは務安郡クラスタ事業団の金庸科団長など10名が参加し、唐芋ケーキの講習会や農業機械の展示説明会、地元自治体との意見交歓会など各種のイベントを実施した。そして今年中に中国と韓国でも開催することを申し合わせた。

ここに至るまでには、すでに私たちと両国の唐芋関係者との交流が進められて来ており、その経緯を語ることで両国の唐芋事情を報告したい。

両国の視察団が次々と来訪

私の経営する「フェスティバロ」という会社には昨年、1,500人の見学者が訪れた。昨年だけでなく、韓国や中国からも視察団が訪れている。

両国の視察団はいずれも唐芋の関係者である。では、いま何故、両国から唐芋関係者が次々と視察に訪れるのか、その理由を聞いてみると…。「この会社は直営農場で唐芋を百種あまり栽培しており、これを素材にケーキなどを生産し、東京や大阪などの空港やデパートなどで販売している。そして都会から富を地元に還流させ、地元に

職場をつくっている。こうした唐芋による農業・地域振興の一貫システムを一つのバックとして見学できるから」というのである。

NPO「唐芋ワールドセンター」の設立

私は単なる唐芋菓子メーカーとしてのレベルを越えて、これらの唐芋関係者を受け入れる態勢を構築したいと考え、この度、NPO法人「唐芋ワールドセンター」を立ち上げた。これには鹿児島銀行の頭取、地元私大の学長、朝日新聞東京本社元常務など、10名の賛同者が理事となり、私の地元の鹿屋市に本部を置くことになった。

とりわけ、鹿児島は唐芋の主産地であり、栽培技術などはきわめて先進的で、また焼酎や澱粉、クエン酸、製菓（飴、カリントウなど）の加工場が多数稼動し、地域経済を支えている。この状況は、世界でもまれではないだろうか。しかしその情報は個々に散らばっているだけで、全体として系統的に掌握できる施設はない。

私は自分の創業した唐芋ケーキの会社だけでなく、地元の幅広い情報も集積し、誰もが自由に唐芋について学べる施設をつくりたいと希望している。栽培から加工、販売のモデルを展示し、また唐芋の料理法の開発、栄養分などの研究、原産地や伝来などの歴史、各地の民俗などを展示する施設

をつくり、そこを国際交流の場にもしたいと希望している。これがNPO法人『唐芋ワールドセンター』の目的といえる。

中国・韓国を調査に訪問

この法人が発足したところで、2009年9月に10日間にわたり中国の唐芋事情の調査に出かけた。さらに同年11月には一週間ほど韓国にも出かけた。

両国の唐芋事情には圧倒された。政府の強力な後押しによって、両国ともこの2～3年の間に、まったく新しい時代を切り開いていることをまざまざと見せつけられた。正直言って日本は取り残されるのではないかと、という危惧さえ抱いた。

この時期、何故、唐芋が両国で見直されたのか、それはやはり世界経済のグローバル化によって、地域の農業や農村などが急激に衰微してゆき、都会との格差が拡大し、青年層の流出などが深刻になっているためであろう。このような事態を巻き返すために、唐芋を活用した農業・農村の再生が推進されているといえよう。さらに、両国とも将来の食糧危機を視野に置き、唐芋を今の時期から活用する試みを実施していると考えられる。

品種改良、見本農家の育成を進める中国

中国の調査は中国農業大学の劉慶昌教授の案内で、北京を中心に河北省石家荘、江蘇省徐州、山東省済南などの唐芋に取り組む農業試験場を主にまわり、その試験場に関わる農家などを訪ねた。

ちょうどこの時、北京大興区甘藷種子管理所で唐芋の展示会が開かれていた。この農場には115品種の唐芋が栽培されてお

り、それを掘り起こして畑に並べ、研究員たちが集まった数百人の農家に品種の特徴や栽培法などを説明していた。この中から農家は自分の栽培したい品種を選び、研究所ではそれを受けて苗を育て、来春に安価で農家に渡すという（図1）。

石家荘の河北省農科院作物研究所でも唐芋の品種ごとの栽培研究や品種改良を進めており、張松樹研究員は「優秀な品種の栽培を確立して、農家を育成するのが任務だ」と語った。その一例として案内された農家は、もともと果樹を手がけていたのだが、今年はじめて9 haの唐芋栽培に取り組み、これが経営上うまくいったので、来年は200haに挑戦するという。この農家は「何も心配していない。市場は十分に受け入れてくれる」と自信たっぷりに語った。

農家がこのような挑戦ができるのは、国家の研究所の指導支援があつてのことで、200haという日本では信じられぬ規模の農地の確保は、政府から飛行場跡地を借用できるためだという。そこで栽培されているのは「紫青1号」という品種で、皮は赤く肉質は黄色っぽい“いも”であった。

徐州の中国農業科学院甘藷研究所では1,200品種の唐芋を実験栽培しており、稲



図1 北京大興区甘藷種子管理所における甘藷栽培風景

を刈り入れた後の水田でも栽培実験を行っていた。この研究所が指導支援している農家も、唐芋栽培は全くの初心者であった。もともとは肥料販売業を営んでいたという。やはり大規模な唐芋栽培に着手しており、品種は「冀諸98号」という名称で、農家は「他の作物より収入が良い」と話していた。

同研究所の馬代夫所長は、「唐芋は食料として将来大きな可能性がある。唐芋農家を広げるためには、まず見本となる農家を育成すべきだ。そのために経営感覚のある人材を選び、一緒に検討しながら指導を積み重ねていく方針だ」と研究所の役割を語った。

済南の山東省農業科学院作物研究所甘藷研究センターでは若い研究員が大勢育っており、分子遺伝実験室などの施設も整っていた。ここでは栽培はもとより加工・流通などの研究もなされており、青果用として販売も試みていた。6種のカラフルな品種をセットした「農科院彩色甘藷」という商標で、5 kg箱の商品を市場に卸している。また紫芋の干しいもなど、さまざまな加工が試みられ、その試作品が展示されていた。女性リーダーの王慶美研究員は「唐芋は栄養豊かで美味しい品種が次々と誕生しているので、市場も広がっており、農業収入が高い。国も力を入れているので、研究所も頑張っている」と笑顔を見せた。

北京最大の野菜市場に行くと、唐芋の販売ゾーンが広大で、各地から大型トラックで唐芋を運んできた農民たちが、そのトラックや周辺に泊まりこんで販売をしていた。唐芋は箱などに納められているのではなく、テントを張ったトラックの荷台にレ

ンガ積みのようにぎっしりと押し込まれて、それを崩しながらビニール袋に移して量り売りをしていた（図2）。市場での販売品種はきわめて多彩で、日本の品種も珍しくはなく、例えば「山川紫」は「川山紫」という名称で、すぐれた薬効の逸品という立て札が立っていた。

この市場で販売されているのは、前述の農業試験場などの指導・支援下で栽培されたものではないかも知れない。販売している農民に質問してみたが、誰も詳細は語ってくれなかった。どこからトラックを走らせてきたのかも分からなかった。

ご承知のとおり、中国は世界最大の唐芋生産地であり、現在、368万 haで唐芋が栽培されている。その用途の半分以上が澱粉に加工され、水飴や春雨などの素材となっているという。しかし澱粉工場による環境汚染と安価な澱粉が輸入されていることもあり、国内生産は政策的にも押さえられている。また多くが家畜の餌としても活用されていたのだが、最近になり青果用としての需要が急激に伸びていることは、結局、政府の強力な後押しで試験場などの品種改良などが功を奏し、その成果を農業に活用しているためであろう。研究員が育ってい



図2 北京最大の野菜市場における唐芋販売

ることもあり、さらに良質の品種が生まれ、栽培技術が向上し、スケールの大きな栽培システムの確立によって、唐芋の振興が進むに違いあるまい。

クラスタ事業で重点施設をつくる韓国

韓国でも唐芋が食料としてブームを巻き起こしている。3年前に比べて3.8倍に需要が拡大し、農家は同じ面積で米の3倍の収入をあげているという。

そんな韓国の唐芋事情の調査は、全州大学の宋海安学長や又石大学の崔東晃教授の案内ではじまった。この両氏は政府の方針を受けて産学研究団体をつくり、唐芋を調査研究してその成果を農家に普及させる活動を進めており、日本にも何度も視察に訪れ、私の会社にも来られたことがある。

産学研究の成果として、益山市の農家に案内してもらった。そこにはコンピュータ管理による唐芋の大規模な貯蔵庫が新設されていた。まず貯蔵庫で高温処理して唐芋を休眠状態にして、定温倉庫へ移し、湿度やガス抜きなども自動管理する最新技術を駆使したこの施設は大学の研究成果によるものだ実感した。さらにその隣接地には新たな国庫補助による選果場も建設されつつあった。これは環境保護を目的とした補助事業を引き出すために、必要以上とさえ思われる衛生管理の整った施設であった。宋学長は「まず唐芋で農家は儲かるという事例を作るのが、私たちの役割だ」と語った。

益山市には韓国最大規模の唐芋選果工場もオープンしていた。軍施設払い下げという敷地は広く、やはり政府補助で建設されたものだが、事業主体は南部の海南地区の

唐芋集荷企業であった。ここでは海南地区から搬送されてくる唐芋を選別してソウルなどの大都市の市場に売り込んでいるとのことで、ベルトコンベアで流れてくる唐芋を大勢の女性パートが2kg入りのビニール袋にパックし、さらにそれを5kgの箱に納める作業を行っていた。扱っているのはすべてが「紅おとめ」で、日本から持ち込まれた品種だという（図3）。

次に訪れたのは務安郡で、昨年8月、この地の人々が30名近くの団体で私の会社を視察に来られたので、その時に知り合った人々に会うために出かけた。

務安の人たちが私の会社を訪ねたのは、自由貿易協定に対応するための政府補助を受けてのことだった。それは務安コグマクラスタ事業団のメンバーであった。韓国では政府が各作物別に全国の各農家グループから振興策を募集し、そのコンベの合格者に資金補助を出している。務安の唐芋生産グループは、クラスタ事業団を立ち上げてこのコンベに応募し、合格した。そして唐芋の洗浄、選別、貯蔵などが一つにまとまった大規模な施設を整備できた。日本でも例がないほどの先端技術を取り入れている。

この事業団の金虎山社長は「唐芋は大都



図3 韓国最大規模の唐芋選果工場（益山市）

会で健康食品として見直され、急激に需要が伸びており、それに対応するには生産地にこのような施設を整える必要がある」と語った。

次に訪ねたのは全羅南道の海南で、韓国でも有数の唐芋主産地である。この花山農協の呉相湊組合長も昨年9月に、私の会社を訪ねられ、顔なじみであった。同組合でも、青果用唐芋の需要拡大に対応する活動が進められていた。大規模な選果場や貯蔵庫が整い、ソウルなどの大都会の市場に送り出していた。組合経営のスーパーでは、真ん中に色とりどりの5 kg箱が積み上げられ、各種の唐芋が販売されていた。主流は紫芋で、日本で大ブームの安納芋も商品化されていた。1箱買うと焼きいも用の鍋をプレゼントするという販促アイデアも拔群で、さらに驚くべきことにイギリスやオランダなどのヨーロッパ諸国に青果用の生いもを輸出して人気を博しているというのだ。

こうした視察を通して、中国と韓国はともにこの2～3年のうちに唐芋事情が大きく変わったことが分かった。しかし両国を比較してみると、その状況の差もはっきり分かった。中国は農業試験場などによる栽培研究、品種改良などが進み、驚くほど大規模なスケールの模範農家の育成に着手している。そして青果用の需要も拡大して将来に期待がもてる。しかし貯蔵などのシステムはまだ立ち遅れていた。農業試験場が手がけている貯蔵庫は地下式がほとんどで、湿度管理なども初歩的で、ガス抜きなどはほとんど重視されていなかった。そして貯蔵作業も機械化は考慮されておらず、先端技術の導入も程遠いように思えた。

これに比べて韓国は洗浄、選別、貯蔵などに先端技術が全面的に取り入れられ、その作業も徹底的に機械化されている。務安などは有機栽培が先行しており、普通の「いも」より2倍の価格で販売する成功事例も深く根付かせている。一歩進んだレベルにあることを実感できた。

今後の課題は両国とも加工開発と雇用創出

中国でも韓国でも、至れり尽くせりの歓迎を受け、ただ驚くばかりであった。どうしてこれほど歓迎されるのか、初めはよく理解できず、慌ててしまった。次第に分かったのは、私が唐芋の加工工場を建設する目的を持っていると誤解されていたようだった。しかし私にはその意図は全くなかった。NPO「唐芋ワールドセンター」の活動の一環として訪ねたことを伝えねばならなかった。

それでも各地で盛んに言われたのは、「唐芋の加工法を教えてくれ」ということであつた。両国とも青果用の需要は大幅に伸びているが、やがて頭打ちになると見込んでいた。それを乗り越えるには加工して別の販路の開発を行う必要に迫られている。中国山東省農政局長の王可敏氏は、「唐芋は市民たちに認められ産業として将来はあかるい。それも加工によって本格的な産業になれる。加工場ができれば農家の経営も安定し、農村も活性化する。これを実現するためにぜひ力を貸してほしい。交流を進めたい」と熱を込めた。

海南郡の郡主（知事）の金忠植氏は、「唐芋で加工場という職場をつくりたい。加工場を成り立たすのに、売れる唐芋商品を作るノウハウを知りたい。まず姉妹盟約を結

び、交流を深め、協力関係を築こうではないですか」と名誉市民としてのメダルを下さった。

中国のそれぞれの農業試験場でも、韓国の宋学長の指導する農家でも、務安クラスタ事業団でも、また花山農協でも「加工法を知りたいので交流したい」という申し込みを受けた。行く先ごきで異口同音にそれを言われ続けた。私たちのNPO法人が何をしなくてはならないのか、十分に理解することができた視察旅行であった。

東アジア唐芋ワークショップの開催

2010年2月1日から4日まで、私たちの地元鹿児島市と鹿屋市に、中国と韓国の17名を迎えて、唐芋のケーキづくり講習会を開いた。韓国の務安クラスタ事業団の女性グループなど、この講習会に期待して来訪しただけに熱気があふれた。この講習会を主にして、唐芋農場での情報交換、唐芋栽培のための各種機械の見学、さまざまな加工品の試食、各種唐芋の焼きいも大会など盛りだくさんで、市長や市議会の表敬訪問と意見交歓会なども行い、行政としてもこの運動に参画してゆく流れも生まれた（図4）。



図4 東アジア唐芋ワークショップのメンバー

このワークショップは、今年4月に中国で、8月に韓国でも開かれることを、参加者で申し合わせた。私たちのNPOでは、そのときも唐芋ケーキなど加工法の講習会を開きたいと考えている。

日本は中国や韓国に対しては過去の歴史的経緯から、何かとぎくしゃくした事態に陥りがちである。そういう国家や政治のしがらみと関わりなく、唐芋というテーマで自然につながった交流がスタートしたことは、信じられない気分である。しかし、これも新しい時代の流れに即しているのではなかろうか。国境を越えた地域ネットワークでそれぞれの地域を蘇生させようとする活動は、結局、国家や政府の枠を超えたグローバル経済に歯止めをかけるエネルギーになるのではなかろうか。

日本の国際貢献は、貧しい国に資金や物資の援助をするのが主流であった。しかし金や、物を与えるより、食料生産の方法を伝授するほうが永遠の効果をもたらすはずである。中国や韓国との間に形成された国境のない地域ネットワークがさらに各国に広がるならば、貧しいという問題も地域どうしが協力しあって解決していくことも可能になるだろう。将来、もしも各国家を越えた食糧危機が襲った場合、政府間でその調整をはかるのは困難かもしれないが、国境のない地域ネットワークを確実なものとして構築しているならば、お互いに共生するための調整が働くに違いない。

唐芋は世界をつなぐ不思議な力を秘めていることを、この度、改めて強く知らされた。